

PETRONAS SYNTIUM TEAM

PETRONAS SYNTIUM TEAM REPORT

スーパー耐久シリーズ2009
第1戦「MOTEGI SUPER TAIKYU」
2009年3月29日（1dayレース）

▲▽▲予選 天候：晴れ 気温10℃（正午現在）

2009年度の開幕を迎えたスーパー耐久シリーズ。今シーズンもペトロナスカラーのBMW Z4 COUPEがサーキットでその勇姿を披露する。うち1台には昨年のチャンピオンに与えられるゼッケン1がつけられ、PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEはNo.1とNo.28の2台で戦いに挑む。

今シーズンはレースウィーク中のスケジュールに大幅な変更が加えられ、中身が凝縮。大会によっては日曜日に予選と決勝を行う「1デーレース」も用意されている。早速、開幕戦のもてぎではこの方法が採用され、土曜日は非公式な専有走行1時間×3セッションとピットウォークおよび公開車検が行われるに留まった。

PETRONAS SYNTIUM TEAMのドライバーラインナップは去年と同様の6名が顔を揃える。だが、その編成が変わり、ディフェンディングチャンピオンの1号車には、谷口信輝、柳田真孝、ファリーク・ハイルマンの3人を採用。一方28号車には、片岡龍也、吉田広樹、ジョハン・アズミが乗り込むこととなった。

なお、今シーズンのレギュレーション変更に合わせて、クルマも一部変更が加えられた。昨シーズン、車両のマイナートラブルから解放されたPETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEは、レースでその実力を存分に発揮したために、車両に性能調整、いわゆる“足かせ”が課せられたのだ。そのひとつが、タイヤ外径。リアタイヤが710mmから680mmへとサイズダウン。さらには車両重量に30kgを上乗せ。レースではライバル達とのより拮抗した戦いになると予測された。一方、コンディションが変わったことで、チームでは改めてクルマのセッティングを強いられることになり、予選前日の専有走行ではその確認などを中心にメニューを消化した。

公式予選は午前9時からスタート。週半ばから肌寒い日が続いたが、この日はよりいっそう冷たい風がサーキットに吹き込み、青空は広がるものの冬のような寒い天気となった。Aドライバーとしてアタックするのは、No.1が谷口、No.28に片岡。谷口は1分57秒201を、そして片岡は1分57秒767をマーク。2台が僅差のアタックを見せ、PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの高いポテンシャルを証明して見せた。続くBドライバーのアタックには、No.1が柳田、No.28は吉田。両者クリアラップを確保し、アタックに成功。柳田は1分57秒242、そして吉田は1分58秒183のタイムを刻んだ。A、B両ドライバーの合算タイムにより決勝グリッドが決定するS耐のレギュレーションに基づき、No.1が3分54秒443で開幕戦のポールポジションを獲得。No.28は3分55秒950で2位。フロントローをPETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEが独占し、予選を終了した。

▲▽▲決勝 天候：晴れ 気温12.1℃（午後3時）

予選後、ほどなくしてピットウォークが始まり、つかの間のファンとの交流を楽しんだチームドライバー達。1デーレースならではの慌しいスケジュールではあったが、ファンの声援を受けて、ドライバーの士気も高まった。

午後2時、84周、400kmにわたる決勝レースがスタート。PETRONASグリーンのクルマに乗り込んだNo.1柳田とNo.28片岡の2台は、僅差の縦並びで1コーナーへと進入し、そのまま接近した状態でコースを周回した。2台の緊迫した走りはその後も続き、序盤こそ3番手の車両を加えた上位3台のトップ争いという勢力図だったが、周回を重ねるごとにPETRONASカラーの2台が抜け出し、レースを牽引する。均衡した2台の間に変化が訪れたのは29周終了時。No.1柳田がピットインし、ハイルマンへとスイッチ、合わせて給油とタイヤ交換を行った。一方、スタートから2番手につけていたNo.28片岡は、No.1柳田のピットインによって前が空いたコース上をここぞとばかり猛プッシュする。しばしハイペースのラップを刻んでいたNo.28片岡はNo.1から10周後の39周終了でピットイン。次にステアリングを握ったのはアズミだった。

昨シーズンのスポット参戦以来のS耐レースとなったNo.28アズミ。片岡のラストスパートが実を結び、コースにはトップで復帰。片岡がマージンを稼げるだけ稼ぐという、攻めのレースを実践したことがNo.28にアドバンテージを与え、No.28アズミは己の走りに徹することが可能となった。No.28アズミは、後方からのプレッシャーを全身に受けながらも落ち着いた走りを披露。そつのない走りを見せていたが、その後方につけるNo.1ハイルマンはS耐参戦3年目。こちらにも負けじと先輩らしい力強い走りでNo.28アズミに詰め寄る。そして迎えた52周目。2台は完全にサイド・バイ・サイドの状態。しかも、その前は周回遅れの車両が4台団子状態でバトルを展開している。この集団にPETRONASの2台が加わった状態でヘアピンへと向かい、アウトラインを取ったNo.1ハイルマンはバックマーカー車両を使って鮮やかにNo.28アズミをパス。見せどころをつくり、再びトップを奪った。

PETRONAS SYNTIUM TEAM

さまざまなプレッシャーを跳ね除け、自らのスティントを完遂したNo.28アズミが55周終了でピットイン。待ち構えた吉田にステアリングを委ねた。2人によるドライバー交代が初めてという気の焦りからか、作業時には小さなミスも見られたが、周りのスタッフが難なくフォロー。チームのサポートを受けた吉田は無事にコースイン、チェッカーを目指した。

一方のNo.1ハイルマンはトップで快走を続け、61周終了でピットイン。朝の予選で使用しただけのマイレージが少ないタイヤへと交換、谷口がコースへと向かった。400kmレースの最後をしめることとなったNo.28吉田とNo.1谷口。リードするNo.1谷口とこれを猛追するNo.28吉田とのタイム差は、一時12秒近くあったが、終盤には5秒程度まで接近。PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの2台はゴール間際になっても緊迫感ある見せ場を作り、その勢いそのままチェッカー。PETRONAS SYNTIUMチームが2台体制となった昨シーズンの開幕戦で果たせなかった1-2フィニッシュを達成した。

◆鈴木哲雄監督

今週末はスケジュールどおりにすべてうまく進みました。去年の開幕戦で果たせなかったチームの1-2フィニッシュができて、うれしく思います。今シーズンはドライバー編成を変えて、チャンピオンチームの1号車にはシリーズ連覇を、そして28号車はドライバーとしての経験豊富な片岡を先生として吉田とジョハンを育成することをそれぞれ目標に戦っていきたいと思います。

◆No.1 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPE

谷口信輝

何事もおきず、最後まで順調にレースができました。予定どおりでしたね。ただちょっと予定外だったのは、1回目のピットインが終わったときに、1号車が28号車に負けていたところでしょうか。後半の僕のスティントでは、与えられたマージンを守ってゴールまでクルマを運ぶことができました。うまくレースを引っ張ることはできましたが、終盤に入ってからちょっと足回りに不安要素が出てきたので、丁寧にやさしめの走りに切り替え、後続のクルマを見ながら、また無線でも周りの状態を聞くなどして、クルマを労わりながら走りました。開幕での優勝が果たせてうれしいですね。

柳田真孝

予選でも思い切りタイムアタックができました。スタート直後は28号車の片岡選手、その後方のZ車両も含め、みんな速いペースだったので、まったく気の抜けない展開となりました。できる限りマージンを作ろうと、プッシュして走りました。寒い天候にはなりましたが、タイヤもうまくグリップし、ずっとコンスタントに走ることができました。僕から引き継いだファリークもうまくレースをマネジメントしていたと思います。最後の谷口さんも申し分ないいい走りをしてくださいました。去年、チームが2台体制になって、開幕戦で1-2フィニッシュを目前にして僕らのクルマがトラブルを起こすという苦い思い出があったのですが、今年は開幕戦の1-2フィニッシュを果たすことができ、それがなによりうれしい。チームのみんながいい仕事をして掴み取った勝利なので、みんなに感謝しています。

ファリーク・ハイルマン

僕のスティントは実に納得いく走りができたと思います。レース中のペースも実に良かったし、安定して走っていたと思います。タイム的にも去年を上回るペースで走ることができました。31周を走りましたが、クールスーツも使わなかったし、ドリンクも必要ありませんでした。確かにタフな戦いにはなりましたが、それがうまくできたことで自信もついたり、達成感もあってとてもハッピーです。

◆No.28 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPE

片岡龍也

いいレース運びができました。“片岡先生”としては、28号車が2位でフィニッシュできて、良かったと思いますし、レースの展開も、ほぼチームの作戦通りに行きました。1号車が先にピットに入ってから前はクリアになったのでできる限りプッシュをし続けたことが、終盤になっても1号車と拮抗した戦いにつながったのではないのでしょうか。1-2フィニッシュもできて、チームとして幸先のいいスタートが切れてうれしいですね。

吉田広樹

ミスなく終わってホッとしています。与えられた中で走り切ることができました。予選は決して満足のいくものではなかったですが、練習走行と比較したらだいぶ良くなりました。決勝では、ピットでのドライバー交代時にジョハンも僕も慌ててしまいました。自分のミスもあったのでもっと落ち着いて処理するようにしたいと思います。僕らは周りからいつでも1-2フィニッシュできて当たり前、と思われるチームですが、その中で自分がどれだけ先輩ドライバーたちに近づいていけるかが今年の課題だと思います。これからつねにベストな戦いをしていきたいですね。

ジョハン・アズミ

初めてのピットストップ、ドライバー交代だったので焦ってしまいました。本当に慌てました。なんとかうまく行って良かったです。ドライバー交代した直後は、走りになかなか集中できませんでしたが、周回を重ねるごとに次第に落ち着きました。でもそれは、チームスタッフがいつも無線で「大丈夫だから、落ち着いていけ」と声をかけて、アドバイスしてくれたおかげです。本当に感謝しています。次の菅生も初のレースになりますが、このまま調子をキープしたいですね。